

ギリシヤ頭巾の謎

一 勇士と大蛇

ギリシヤ神話のヒュドラーヤ『ペーオウルフ』の竜あるいはわが八岐大蛇の例を挙げるまでもなく、蛇、とりわけ大蛇は、古くから人間に危害を及ぼす怪しきものと見なされ、蛇との戦いは英雄譚の最もありふれたテーマの一つとなってきた。

フィリーナと呼ばれるロシアの口承叙事詩では、蛇はまず勇士の父親として姿をあらわす。フィリーナの英雄中でも最古の世代に属するヴォルフの誕生は次のようにならうたわれる。

緑の草木の生い茂る園生の中で
うら若い姫がそぞろ歩きをしていた、

中 村 喜 和

その名はマルファ・フセスラヴィエヴナ。

姫は石につまずいて猛蛇を踏んだ。

猛蛇は緑の山羊皮の靴のまわりに

絹糸を編んだ靴下のまわりに

ぐるぐると身を巻きつけて、

姫の白い股ももをその尾で打った。

そのとき姫は子種を宿し、

子種を宿して赤子を生んだ。

(キルシヤ・ダニーロフ——六)

こうして生まれたヴォルフは、フィリーナの勇士としては例外的に、変身の能力を身につける。そのヴォルフ Volkh という名前自体が妖術使いを意味する volkhv に由来している。右に引用したテクストの中では、彼は

「鋭い目の鷹」や「灰色の狼」や「金の角をもつ赤牛」に身を変え術を習得するばかりでなく、実際にその術を駆使し、さらには貂や蟻にまで化けて、部下を率いて天竺の国を征服する。同じテーマの別のヴァリアントでは、ヴォルフは「かます」となって青海を泳ぐ⁽¹⁾こともできた(オンチュコフ——八四)。

このヴォルフがロシア年代記や『イーゴリ軍記』にあられる実在のポーロツク公フセスラフ(一一〇一年没)と何らかの関係があることは、すでにR・ヤコブソンらによって指摘された。⁽²⁾『イーゴリ軍記』でもフセスラフ公は「精悍な体に靈妙な魂を宿」し、「夜は狼と化して疾駆」したのであった。

ブイリーナと歴史とのかかわりはしばらく措くとしよう。ブイリーナでも蛇が人間の生殖に関与していること(娘や人妻のもとに通う蛇のモチーフはロシア民話の中でも珍しいものではない)は注目に値するが、差し当たって肝心なのは、ヴォルフの異常な変身能力がその特異な出生と結びついていることである。ブイリーナの主人公としてのヴォルフは他国を征服におもむく点でも、他に類のない存在である。ブイリーナの英雄たちはおおむね

ロシアを侵略者の手から守るための戦いで武勇を示すが普通だからである。ヴォルフが蛇の胤であることによって、彼の能力と行動の怪異さは容易に首肯される。

ヴォルフの次の世代の勇士ドブルーニャは逆に大蛇をたおすものとして登場する。ドブルーニャと大蛇との戦いをテーマにしたブイリーナは、この勇士を主人公とする十あまりのテーマの中でも成立年代が最も古くかつ中心的なテーマと考えられている。⁽³⁾現在知られているテキストは、断片を含めて百七篇にのぼる。そのうち質的に最もすぐれているトロフィム・リャビーニン(一七九二?—一八八五)の語りによって、このブイリーナの梗概を紹介しよう。ギリフェルジングの『オネガ・ブイリーナ集』に収められているもので(七九)、全部で四百七十行からなっている。

ドブルーニャは母親に育てられて成人すると、広野を馬で乗りまわし、子蛇どもを蹄にかけて踏み殺すようになる。母親は息子にむかって、サラセンの山の蛇穴へは決して行かぬこと、そこからロシアの捕虜たちを助け出そうとしないこと、ブチャイ川では泳がぬこと、などを忠告する。ドブルーニャは母の教えにそむいて、まずは

るかなサラセンの山へおもむいて無数の子蛇を踏みつぶしてから、プチャイ川へやってくる。川岸で洗濯をしていた娘たちが、裸で泳がないようにすすめるが、ドブルーニャは耳をかさず、裸になって水にはいる。彼が川を横切って流れの中をもぐっていると、西の空から突然大きな物音がとどろいて、三本の首と十二本の尾をもった大蛇ゴルイニシチュエが襲いかかった。大蛇はドブルーニャに炎を吐きかけ、その体を焙り焼きにして飲みこもうとする。素手のドブルーニャは大蛇に立ち向かえない。あわやという時に彼は岸边にギリシャ渡りの頭巾がころがっているのを見つけ、その頭巾で打ちすえて大蛇をたおす。ドブルーニャは相手の胸にまたがって息の根を止めようとするが、大蛇の頼みを容れ、今後は両者が戦わぬ約束をして放してやる。これがドブルーニャと大蛇の最初の衝突である。

プチャイ川を飛び去った大蛇はキーエフの都に舞い降り、この町に君臨するウラジーミル公の姪の姫をさらっていく。まもなくキーエフに戻ったドブルーニャは公から姫の救出を命ぜられて悲嘆に暮れるが、母親にはげまされてサラセンの山におもむく。ドブルーニャが蛇穴に

押し入ると、大蛇はかつての約束をたてにドブルーニャをなじるが、ドブルーニャは逆に相手が公の姪をかどわしたことを非難し、ザバーヴシカ姫はじめ大勢のロシア人捕虜を助け出してキーエフに戻ってくる。

リャビーニンのテクストはこうして終っているが、別の語り手によれば、ドブルーニャは捕虜を救出する前に蛇穴の中で大蛇と戦い、これを打ち殺してしまう(たとえば同じギリフェルジングの五九、一五七)。これがドブルーニャと大蛇との第二の、そして最後の戦いである。地域的にはこのテーマのブイリーナはオネガ系とアルハンゲリク系に大別される。前者ではドブルーニャと大蛇が二度衝突し、後者では一度しか戦わない(最初の戦いだけ)。伝来テクストの数から見ればオネガ系は少数派であるが、古形に忠実であるとされる。リャビーニンの語りかオネガ系に属することは言うまでもない。

二 武器としての頭巾

このブイリーナの筋の中で一見して異様に感じられるのは、ドブルーニャがプチャイ川での最初の戦いでギリシャの頭巾をもって大蛇に打ち勝つことである。テクス

トをそのまま引用すれば、リャビーニンはこの場面を次のようにうたっている。

もう一度むこう岸まで潜って行って

ドブルーニャは岸が上がった。

すると呪われた大蛇ゴルイニシチュエは

ドブルーニャめがけて炎を吐きかけ
彼の白い体を焼きこがそうとした。

年若いドブルーニャは

あいにく何一つ得物をもたず、

大蛇に立ち向かうすがなかつた。

年若いドブルーニャは

切り立つ岸辺を見やったが

岸辺には何一つ見あたらず、

白い手に取るべき得物がなく

大蛇に立ち向かうすがなかつた。

大蛇はさかんに炎を吐きかけ

ドブルーニャの白い体を焼こうとした。

このとき年若いドブルーニャは

ギリシャ渡りの頭巾が

岸辺にころがっているのを見た。

ドブルーニャはこの頭巾を手に取り、
はげしい怒りをこめて

大蛇ゴルイニシチュエを打ちすえた。

大蛇はしめった大地の上の

はねがや草の中にとおれた。

これはあらゆるブイリーナを通じて最も緊張感にあふれた劇的な場面の一つである。裸身の上に何一つ武器をもたず絶体絶命の危機に立たされた勇士が、最後の瞬間にギリシャの頭巾を手に入れて、強大な敵を反対にたおしてしまふ。この一瞬の勝敗の逆転にテーマ全体の興味がかかっているといてもいい。リャビーニンが蛇穴での第二の戦いの描写を全く省いているのは、むしろそれを蛇足と感じたからにちがいない。

だが一体、岸辺にころがっていたギリシャの頭巾(ロシア語では *комка/шляпа земли печекной*)とは何か。この問題にすすむ前に、同じブイリーナの他のヴァリアントをも示しておこう。一部のテクストによれば(キルシャ・ダニーロフ——四八、ギリフェルジング——五九など)、ドブルーニャは家を出るときすでにギリシャの頭巾をかぶり、従僕をしたがえていた。彼がプ

チャイ川で泳ぎはじめると従僕は主人の武器や衣服を片づけたが、頭巾だけはうっかり岸に置き忘れたのであった。また他の語り手にしたがえば(ルイブニコフ——二五、ギリフェルジング——一五七など)、この頭巾は動物の柔かい毛でつくられており、中にはギリシャの土がぎっしり詰まっていて、重さは三ブード(一ブードは約十六キロ)もある。これをとくに「勇士の頭巾」と呼んでいるテキスト(ギリフェルジング——六四)もあるのは、多分その並はずれた重さのためである。

一般に被り物が武器として用いられる例が他のブイリーナにないわけではない。ドブルーニヤの僚友イリヤは異形の怪物イドリシチュからナイフを投げつけられたとき、やはり頭巾でこの飛道具を払いのけたり(ルイブニコフ——八七、一一八)、ときには頭から頭巾を脱いで相手に投げ返して怪物の首を切り落したりする(ルイブニコフ——六)。しかも後者の場合は、その頭巾がギリシャの頭巾と呼ばれている。このテキストの語り手は例のリャビーニンである。さらにイリヤは『三つの旅』の中で、大勢の盗賊どもに囲まれると、兜型の頭巾(ШЕЛМЧАТ КОЛПАК)をふるって死骸の山をきざす(ギ

リフェルジング——一七一)。だがこれらのモチーフはそれぞれのテーマにおいて変種ともいうべき例外に属し、有機的な機能を果たしてはいない。本来的な筋としては、イリヤは巡礼の錫杖をふりまわしてイドリシチュをたおし、盗賊の群には強弓から矢をあびせて彼らを畏怖せしめるのである。

それに反してドブルーニヤと大蛇の戦いをテーマとするブイリーナでは、ギリシャの頭巾のモチーフを含むタ⁵⁾イブがむしろ標準的と考えられる。それに対する例外として、オネガ湖周辺よりもっと北の諸地方で収集されたテキストの中に、ギリシャの頭巾の代りに川岸の砂を投げて目つぶしをくらわせるもの(グリーチャーエフ——三)、剣で斬りつけるもの(マルコフ——七三)、石をつかんで打ちかかるもの(グリーチャーエフ——八七)、鞭をふるってたたきふせるもの(アスターホワ——六八)などが見られることを付け加えておこう。

ギリシャの頭巾そのものについて言えば、それが修道僧あるいは巡礼の装束の一部をなし、マントの襟につづいて頭をすっぽりと覆う帽子であること、そしてブイリーナにおいてはキリスト教の象徴の役割を果たしている

という意見が、帝政末期の著名な研究家フセーヴォロド・ミルレル以来の定説となっている。⁽⁶⁾

巡礼の被り物がギリシャの頭巾と呼ばれている例は、前述の『イリヤーとイドリシチェ』や『四十人の巡礼』などのブイリーナに見出せる。前者ではキーエフ（あるいはツァリグラード、すなわちコンスタンチノーブル）にイドリシチェなる邪教の怪物が来襲し、公（あるいは皇帝）の玉座につく。これを知った勇士が、自分の正体をかくすためあるロシア人の巡礼と衣服を交換して、都に乗りこむ。この場面をリャビーニンはこう描く。

イリヤーは絹の草鞋を足に履き

黒ピロードの頭陀袋を肩にかけ

頭にはギリシャの頭巾をかぶった。

(ルイブニコフ—六)

『四十人の巡礼』の場合もその身支度は右と変らず、語り手がその被り物に言及するときにはきまってギリシャの頭巾と呼んでいる（ギリフェルジング—八六、九六など）。ギリシャ頭巾の形状と象徴性について疑問の余地がないにしても、それだけでは謎は解けない。ほかならぬドブレイニャと大蛇のブイリーナにおいて、なぜ

この頭巾が恐るべき怪物に対する主人公の「武器」となり得たかということである。事実、ブイリーナの伝承者のあいだですらおそらくこの疑問が生じたために、上で述べたように頭巾以外の武器を主人公にもたせたり、あるいは頭巾の中にギリシャの土を詰めて五十キロ近い異常な重さをこの被り物に与えているのである。

オネガのリャビーニンは、すでに引用したテクストで明らかのように、ギリシャの頭巾に余分なアクセサリーを付け加えない。少なくともこの語り手はこの被り物をもつ超自然的な力を認識していたわけである。トロフィームにはじまり世代ごとにすぐれた語り手を輩出させたリャビーニンの家系は、父祖の語りをきわめて忠実に継承した点でも有名であった。⁽⁷⁾トロフィーム・リャビーニンがギリシャの頭巾のモチーフを『イリヤーとイドリシチェ』のブイリーナに「流用」したのも、然るべき理由があつたことだった。イドリシチェは大蛇と同様、人間ばなれした怪物なのである。この怪物はイリヤーに殺される直前、巡礼に姿をやつした勇士と次のような問答を交わす。

「イリヤーはたらふくパンを食べるのか」

「小さなパンを一つずつ食べている」

「やつはどっさり水を飲むのか」

「小さなコップに一杯ずつ飲んでいく」

邪教徒イドリシチェはこう言った。

「イリヤーは何とちっほけなパンを食べ、

何とちよっぴり水を飲むことよ。

おれは一度に一俵分のパンを食べ

一頭分の家畜の肉をたいらげて

水はといえば一樽ずつも飲み干しているのに」

(グリゴーリエフ——三五五)

ギリシャの頭巾が一種魔術的な力をそなえていたことは明らかである。これは頭巾によってたおされる敵手の超自然的性格に対応している。一方、ギリシャの頭巾が大蛇を上回る魔力をもちえたのは、ギリシャからもたらされたばかりのキリスト教をロシア人がそのようなものとして受容したからでもあったにちがいない。

同時に、頭巾が武器として用いられること自体の意味も見すごすことはできない。少なくともリャビーニンのテキストでは、語りの手法として意識的に意外性の効果が期待されていると言えるのではあるまいか。一九二〇

年代にスカフトゥイモフが一般に語りの芸術におけると同様ブイリーナにおいても「意外性と驚愕の効果」が利用されていることを指摘したが、ギリシャ頭巾のモチーフもこの手法の適用として説明できるのであろう。主人公のドブルーニャが危険にさらされたとき、彼は全くの無防備であった。裸身のままで「何一つ得物がなく、大蛇に立ち向かうすがなかつた」ことは二度も繰返され、強調されている。何らかの武器、あるいは武器に代わるべきものが手近かに存在したならば、戦いの帰趨はある程度予想がつく。強大な怪物に追いつめられた主人公は最後の瞬間に武器とは最も縁遠い頭巾を発見する。頭巾が果たして怪物の攻撃をかわしうるか否か、ブイリーナの聴衆の注意はいやが上にも緊張せざるを得ない。そして一瞬後には勝者と敗者の立場が逆転する。このブイリーナが人気を博した理由、あるいはその理由の一つは、この意外性の手法に負っていると考えられるのである。

三 象徴としての大蛇

多頭の大蛇はブイリーナに特有のものではない。ロシアの民話にも、三つから十二までの首をもつ大蛇がしば

しばらわられる。中には名前までゴルイニチと呼ばれて
 王女と愛し合う大蛇さえ登場する（アファナーシエフ
 ——二〇四）民話の中の大蛇も概して人を食べたり美女
 をさらったりする敵役である。複数の頭をもち翼をそな
 えていること、湖や海などの水辺で主人公と戦うこと、
 などの点でも叙事詩と民話の大蛇は奇妙に共通するもの
 をもっているが、民話ではドブルーニヤの大蛇退治にお
 けるように勇士との戦いそのものがテーマの中心となる
 ことはない。

神話学派のアファナーシエフは「冬の雲と霧を悪魔的
 に体现したもの」が大蛇であると考⁽⁹⁾えた。同じくオレス
 ト・ミルレルも大蛇現象の神秘的な擬人化をこの怪物の
 中に見ようとした⁽¹⁰⁾。これに対して歴史学派は大蛇を異教
 の象徴と理解した⁽¹¹⁾。最近のソビエトの研究者たちは大蛇
 の出現を遊牧民の来襲と受け取る考えに傾いている⁽¹²⁾。そ
 の中であって、最近亡くなったブロープの解釈はやや特
 異であるが強い説得力をもっているように思われる。彼
 はそのタイボロジの見地から、古い時代の叙事詩にあ
 らわれる敵役ほど神話的な性格を帯びていること、一般
 に怪物の姿をとった敵との戦いをテーマとするブイリー

ナが発生的に古い叙事詩の層に属していることを指摘し、
 ドブルーニヤの大蛇退治を次のように意味づけるのであ
 る。「大蛇に対する勝利は、過去のもろもろの暗い力に
 対する若いロシア国家とその新しい文化の勝利として理
 解される。大蛇は、ロシア文化とロシア国家の発展によ
 ってくつがえされた国家形成以前の過去の芸術的形象で
 ある」⁽¹³⁾。

ブロープは大蛇を異教の権化と呼んではいないが、結
 果的には伝統的な歴史学派と同一の結論に達しているの
 は注目すべきことである。彼のいわゆる「新しい文化」
 が、ギリシャすなわちビザンツ帝国から伝えられたキリ
 スト教的文化であることは、改めて言うまでもないであ
 ろう。キーエフ大公ウラジーミルがドニエプルでキーエ
 フ市民に受洗を強制し、キリスト教をもって若いロシア
 国家の国教と定めたのは九八八年のことであった。この
 ときウラジーミルの叔父にあたる歴史上の人物、ブルイ
 ニヤ、がノヴゴロドの市民に「火と水をもって」洗礼をほ
 どこしたことは有名である。

最初に述べたように、ヴォルフ・フセスラヴィエヴィ
 チの母親は蛇によって懐胎し、息子を生んだ。そのヴォ

ルフは変身能力を獲得してブイリーナの最初の勇士の一人となった。蛇が変身するモチーフはいくつかの民話に含まれている(アフナーシエフ——二〇四、二七六など)。ヴォルフを主人公とするブイリーナでは、まだ蛇に対する敵意はあらわれていない。むしろこの爬虫類動物のもつ神秘的な力への恐怖、いやむしろ恐怖をまじえた賛美の気配さえ感じられる。これに対してキリスト教受容以後にこの信仰とともにもたらされた文字で記録されるようになった文献では、蛇は忌むべきもの、憎むべき対象として立ちあらわれる。まずキリスト教徒に敵対する異教徒、とりわけロシアに侵入を繰り返すチュルク系の遊牧民ポーロヴエツが蛇になぞらえられる。たとえば、十一世紀後半から十二世紀初めにかけてロシアに君臨したウラジーミル(二世)・モノマフ公は、ポーロヴエツ族に対する勝利を「主はわれらをわれらの敵から救いたもうた……そして蛇の首を断ち、ロシアの民に食物として与えられた⁽¹⁴⁾」と表現する。挿絵入りの年代記として有名なラジヴィール年代記はこれに呼応するかのようになり、一一二二年のロシア軍とポーロヴエツ軍の戦闘の記事への挿絵の中で、後者を蛇の姿で描いている。キリス

ト教徒に改宗したロシア人はなお異教にとどまっている遊牧民に対して、このような形で文化的優越感を具象化したのである。

蛇を否定的象徴とする考え方はキリスト教とともにロシアに伝わったか、あるいは少なくともキリスト教文化の滲透に影響されてロシアで確立した観念の一つと想像される。キリスト教にまつわるユダヤの旧約伝説は、エデンの園で禁断の木の実を女に味わせたのは蛇の形をした悪魔であると教えた⁽¹⁵⁾。また竜退治の聖者として有名な小アジアの聖ゲオルギオス(四世紀)の伝説は中世ロシアでも広く知られた⁽¹⁶⁾。悪魔が翼をもつ蛇の姿で出現し女を誘惑するという考えは『ムーロムのピョートルとフェヴローニアの物語』のような聖者伝文学にも影をおとしている。

何よりも一般の民衆にとって身近かなものは、ゲオルギオス、というよりはロシアではゲオルギイの名で知られる聖者のイコンであったろう。十四世紀以降ノヴゴロド派やロストフ・スーズダリ派のイコン画家たちはこの聖者をおびただしい数の聖像に描いた。傑作として現在に残るものも少なくない。ゲオルギイの像はキーエフ時

代初期には上半身だけか、あるいは直立の全身像であったが、十三世紀からは大蛇退治の構図が多くなっている。そこではおおむね白馬にまたがった聖者が長い足もとの大蛇の頭を突き刺している。(ごく稀には、頭部をもたげた大蛇に対して剣を振り上げているものもある。)大蛇は常に翼をそなえ、その付け根に近いところから鋭い爪をもつ二本の脚が生えている。槍で刺された大蛇は身をよじらせて、大蛇の尾の先端はかならず画面の左あるいは右下隅に描かれる山の中の洞窟に達している。この大蛇はまさしく「サラセンの山の蛇穴」に棲みドブルーニヤを襲った大蛇そのものではなかったか。「サラセン」はブイリーナにおいては、ロシアから遠くはなれた異境を意味した⁽¹⁷⁾。ヴォルフの父の蛇はサラセンの山とはいかなるかわりももたなかったのに、ドブルーニヤの大蛇にいたってはじめてサラセンの蛇穴が言及されるのは、それがキリスト教信仰に敵対する力を象徴するようになったためであろう。ゲオルギイのアイコンの構図の変化にフォークロアの影響が看取できるのであるまいか。⁽¹⁸⁾

本稿で用いたブイリーナならびに民話のテキストは次の

刊本による(引用順)。

- キリシヤ・ダニローフ *Древние русские стихотворения, собранные Куршено Даниловым. А. П. Евгеньева и Б. Н. Путилов(ред.).* М.-Л., 1958.
 オンチチコーン Н. Е. Ончуков. *Печорские быльи.* СПб., 1904.
 キリンチンミン *Онежские быльи, записанные А. Ф. Гиллфердингом летом 1871 года.* Изд. 4-е, т. 1-3, М.-Л., 1949-1951.
 НТНМ *Песни, собранные П. Н. Рыбниковым.* Изд. 2-е, т. 1-3, М., 1909-1910.
 Гричарофф С. И. *Гулев Быльи и песни южной Сибирь.* Новосибирск, 1952.
 Вантон А. В. Марков. *Беломорские быльи.* М., 1901.
 Гричарофф А. Д. Григорьев. *Архангельские быльи и исторические песни, собранные в 1889-1901 гг.* т. 1, М., 1904; т. 3, СПб., 1910.
 Анастасов А. М. Астахова и др. *Быльи Печоры и Зижнего Берега (новые записи).* М.-Л., 1961.
 Алфья・Кричарофф *Быльи М. С. Круковой.* т. 1-2, М., 1939-1941.
 Афанасьев А. Н. *Народные русские сказки А. Н. Архангельского в 3 томах.* М., 1957.

Русской литературы, вып. 3, СПб., 1862, стр. 1.

(9) Там же. вып. 1, СПб., 1960, стр. 129.

(17) 中村「ロシア口承叙事詩における地中海世界」、『橋論叢』一九七四、十二月号。フィリーナの大蛇とは異なり、アフナーシエフの民話の蛇は森や湖や海を棲処とし、*тиса*。

(81) 聖ゲオルギオスの聖像について、В. Н. Даварев. *Новый памятник станковой живописи XII в. и образ Георгия-воина в византийском и древнерусском искусстве. Византийский восток*, т. 6, 1953, стр. 186-222.

聖ゲオルギオスの大蛇退治の伝説と宗教詩 (Духовные стихи) 盲目の吟唱者が施しを求めながらロシア各地をうたい歩いたもの。ここではゲオルギオスは「勇敢なるヒーロー」としてあらわれる)との関係を論じたものに、В. Д.

Проп. Эмеборство Георгия в свете фольклора. *Фольклор и этнография русского Севера*, Л., 1963, стр. 190-208. *がある。*

この聖者はロシアでは農民の守護聖者、とくに家畜の保護者として崇拜された。いわゆる「ユーリイの日」がこの聖者の祝日であった。西ヨーロッパでも聖ゲオルギオスは非常に尊崇をうけ、その大蛇との戦いの伝説は中世からルネサンスを経て近代にいたるまで、多くの有名無名の画家の作品に描かれている。ギリシャ正教圏ではロシアについてブルガリアでも聖ゲオルギオスのイコンが数多くつくられた。しかしロシアの場合をのぞき、大蛇の尾が山中の穴に達する例は、きわめて少ない。

(一橋大学教授)

* 本稿は昭和五十一年度科学研究費補助金(総合研究(A)課題番号一三九〇一〇)による研究成果の一部である。